

「中級クラスでの文法の取り扱いについての一考察 ー場面シラバスを用いてー」

太田 真由美

0. はじめに

夏期教育実習のCクラス（1時間目）では、場面シラバスを用いて、学習者に実践的な日本語の運用能力を身に付けさせることを目的とした。そして、授業を進める上で、場面シラバスの中に、どのように文法項目を取り入れていくかが課題となった。

これは、学習者へのニーズ調査、コースの開催日数などから、Cクラスの基本方針を「新たな項目を付加するよりも、現在持っているものを最大限利用することで、情意面での負荷を下げる。実用的な項目を取り上げつつ、内容の面白さ、達成感を最重視する。」こととし、また、過去の中級クラスの実習報告から、本コースの中級クラスでの文法の扱いは、場面シラバスの中に組み入れるのが有効と考えたことによる。

また、実習生（筆者）は、授業の手順を、①導入（場面・モデル会話を提示する。授業目標を確認させる。）、②文法（文型・機能を絞って学習させる。）、③会話（モデル会話をロールプレイなどで発展させる。文化的な表現とともに習得させる。）、④応用（学習者が遭遇する他の場面をタスクなどで学習させる。）とすることを計画した。

しかし、実際の実習の現場では、Cクラスに配属された学習者は、当たり前のことかもしれないが、既習歴が様々で、学習者の変動もあった。そして、学習者が身に付けている日本語能力（各技能）は、経験の浅い実習生（筆者）が、事前に把握しきれるものではなく、授業を行うことにより、驚きとともに明らかになっていった。従って、実習生（筆者）は、実習期間中、計画していた授業の手順を十分に行えたとはいえず、場面シラバスの中に、どのように文法項目を取り入れていったらいいか、試行錯誤しながらの授業となったが、考えるところも大きかったと思う。

各授業の終了時には、学習者に協力をお願いして、授業に対するアンケート（資料参照）を行った。実習生（筆者）の行った授業と、授業に対する学習者のアンケートに基づき、中級クラスにおいては、「どのように文法を場面シラバスに組み入れたらいいのか、どのように実際の現場で文法項目を取り扱ったらいいのか」という問題について、考察を試みたい。

1. 学習者

過去の実習報告から、Cクラス（中級クラス）には、初級の文法項目を既習済み（何らかの学習方法により、初級の教科書を一通り終えている）の学習者が想定された。

しかし、本年度は、クラスを4クラスとし、人数により順にA（ゼロ初級）、B（初級）、C（中級）、D（上級）クラスとしたので、Cクラスは、初級後半から中級である以下の学習者となった。

学習者	国籍	性別	学習歴	滞在歴	使用教科書
A	アメリカ	男性	1年	1ヶ月	思い出せない
B	カナダ	男性	4年	11ヶ月	みんなの日本語 I II
C	オーストラリア	女性	9年	9ヶ月	色々
D	カナダ	男性	4年	5年8ヶ月	
E	アイルランド	男性	1年	2年	Japanese for busy people

但し、6日間のコースのうち、学習者Eは1日（2日目）だけの出席であり、実質的にA、B、C、Dの4名で授業は行なわれた。学習者A、B、Cは全て出席、学習者Dは体調のため、3日間の出席であった。

実習生（筆者）の学習者の観察を追記する。

学習者A（奥さんが日本人）は、知的な人であるが、年齢的なこともあってか、学生のように日本語を勉強しようとするタイプではなく、いわゆる文化センターの教室のように、ゆっくりと、生活の中で使う日本語を身につけていきたいタイプのように伺えた。学習者Eが不参加となったこと（かといって、学習者AがBクラスのレベルではなかったこと）が、学習者Aにとって、配属されたCクラスが難しいレベルのクラスになってしまったことは否めない。

学習者Bは、こつこつ真面目に勉強するタイプで、積極的に話す方ではないが、ふればよく答えるし、（意外に文法が入っていないのだが）文法をきちんと学習することを好み、文法に関してよく質問した。

学習者Cは、Cクラスの優等生的な存在であった。文法もしっかり入っており、積極的に会話もした。学習者Cも、文法をきちんと学習することを好んだ。

学習者Dは、言語感覚があり、日本語能力も高かった。会話はできたが、文法は入っていないようであった。学習者Dは、どんな学習にも真摯に取り組んでいた。

このように、Cクラスは、結果として、既習歴、学習への取り組み方、或いは、性格が様々な学習者からなる少人数のクラスとなった。また、特に前半は、日によってメンバーの異動があり、クラス全体のレベルが上下した。

2. 授業内容

1日目～5日目の授業（6日目は読解の授業を行なった）の場面・会話・文法項目は以下の通りである。

	場面	会話	文法項目
1日目	自己紹介 （互いの出身・ 趣味などに ついて話す）	・クリスは、新しく来たAETのジョンに、友達のたけしを紹介する。 ・ジョンは、たけしと出身地や趣味について話す。	～として ご～（polite） ～より～の方が～ ～のは Volitional Form+ と思った Potential Verbs ～んです
2日目	家電を購入する	・ジョンは、電子辞書を買いに家庭電	Extra-modest

	美容院に行く	<p>化粧品のお店に行く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョンはパンフレットで購入する商品を決めて、商品が一番安い店に買いに行く。 ・ジョンは、髪を切りに美容院へ行く。 	<p>Humble Expressions ～のが</p> <p>Honorific Verbs お+verb stem+下さい ～ておく</p>
3 日目	電話で誘う	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョンは、電話で、たけしを映画に誘う。 	<p>まだ～ていません ～なら ～ている</p> <p>Transitivity Pairs あげる／くれる／もらう ～てくれてありがとう</p>
4 日目	同僚の先生と食事に行く	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョンは学校の同僚の先生と食事に行く。でも、約束の時間に遅れてしまう。 ・和食の店に入り、注文する。 ・食事の後、会計をする。 ・数日後、ジョンは、友達のとけしと喫茶店に入る。 	<p>～てしまう ～ものですから お+verb stem+になる ～そうです</p> <p>V(Causative)+て下さい Causative Sentences</p>
5 日目	学校へ連絡する 校長先生と会話する	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョンは、体調が悪いので、学校へ欠席の連絡をする。 ・通勤電車が事故のため遅れてしまう。ジョンは、学校へ電話をする。 ・台風のため、通勤電車が止まってしまう。ジョンは、学校へ電話をする。 ・放課後、ジョンは、校長先生に話し掛けられる。 ・ジョンは、校長室に行くが、校長先生はいない。事務局長に聞く。 	<p>敬語一覧表 V(Causative)+ていただけない でしょうか ～にお伝えいただけますか ～ので</p> <p>Passive Sentences Honorific(Passive Form) ～つもりだ name という item</p>

3. 授業の進行と問題点

- 1 日目 実習生の自己紹介 → 学習者の自己紹介 → 会話の呈示 → 文法説明・確認
→ タスク（初対面の人に話しかける） → クイズ（その人は誰でしょう）
→ テキスト・資料の確認 → フリートーク
- ・ 文法を意識させずに定着させることを考えていたため、文法説明・確認はさらりと流した。特に、Volitional Form、Potential Verbs は、通じれば良いとした。
 - ・ 自己紹介など、極めてスムーズに進み、会話も活発だったので、タスクの前に予定していたチェーンの自己紹介練習をとばした。
 - ・ 1 日目の授業で、学習者達は「できる」と思い込み、学習者間のレベル差、学習者の文法力

のなさを見逃してしまった。

しかし、振り返ってみると、フリートークが活発にできる学習者達だったので、目標通り、文法を意識させないコミュニカティブな授業が一番できていたのかもしれない。

- 2 日目 1 日目の文法項目の復習 → 会話①の呈示 → 文法説明・練習 → 表現説明・練習
→ 会話②の呈示 → 文法・表現説明 → 会話③の呈示 → 文法・表現説明
- ・ さらりと流す予定だった前日の文法の復習が、新たに 2 名の学習者が加わったこと、学習者に文法が入っていないことが分かったことで、Volitional Form、Potential Verbs を中心に時間をかけた文法の授業になってしまった。
 - ・ しかも、その後、会話①はともかく、会話②、会話③と立て続けに、尊敬語・謙譲語などの文法説明を延々とする授業としてしまった。
 - ・ 前日の授業で、学習者達に力があると誤解してしまったこと、時間が余ってしまったことで、3 つの会話を用意したのであるが、学習者に対する評価が間違っていたと気づいた時点で、授業内容を変更すべきであった。
会話の呈示は 1 つに留め、(②③の無意味な会話を学習者に押し付けるのではなく、) 後は、場面を呈示してやって、「こんな時、どうしますか。」と、学習者からサバイバルな会話を出させるべきであったと考える。

- 3 日目 2 日目の文法項目の復習 → 文法 (自他動詞など) 確認 → 会話の呈示
→ 文法・表現説明・練習 → タスク① (電話で誘う・受ける)
→ タスク② (道の説明をする) → リスニング
- ・ 前日の反省から、授業をタスク中心のものとした。電話機の不具合、誘導の不手際もあったが、タスクは楽しいものとなった。
 - ・ しかし、時間がおしてしまい、「リスニング → タスク②」の予定を、リスニングを抜いて、タスク②をさせたものの、学習者は上手く道案内ができなかったため、その後、抜いたリスニングをさせ、授業時間をオーバーしてしまった。タスク②をやめて、リスニングだけをさせれば良かったと思う。
 - ・ 文法の説明では、一方的にしゃべっているため、学習者に当てたり、練習させたりすることが必要である。また、(この時点では) 会話を一人で読み上げて呈示することはよくないと感じていた。

- 4 日目 3 日目の文法項目の復習・練習 → 会話①の呈示 → 文法・表現説明 → 表現練習
→ 文法・表現説明 → 会話②の呈示 → 文法・表現説明 → 会話③の呈示
→ 文法・表現説明 → 文型練習① → 文型練習② → 会話④の呈示
→ 文法・表現説明 → ロールプレイ → フリートーク
- ・ 前半 3 日間の後、4 日間のインターバル (休日) を挟んだ後の授業再開であったが、3 日目の文法項目の復習をするに当たっては、そのことを考慮して行うべきであった。
 - ・ インターバルの間に、学習者に文法力が思いのほかでないことから、方向性が文法をしっかり

押えるというように変わっている。しかし、このように細かい文法を押し付けることに何の意味があるのだろうか。ボトムアップの授業になってしまっているが、同じ場面シラバスを使うにしても、トップダウンの授業の方が、学習者にあっていたのではないか。

- また、会話のテープを作成した。授業の流れは良くなったが、逆に、味気ない感じがする。

5 日目 4 日目の文法項目の復習・練習 → 会話①の呈示 → 文法・表現説明 → 表現練習
→ ロールプレイ → 会話②の呈示 → 文法・表現説明 → 表現練習
→ ロールプレイ → 会話③の呈示 → 文法・表現説明 → 文法説明
→ 問題（尊敬語をさがす） → リスニング

- ロールプレイにおいては、電話を使うなり、ホワイトボードで仕切るなりして、電話をかけているという状況を作るべきであった。
- 文法説明においては、学習者を戸惑わせる難しい語ではなく、分かりやすい語の例文で説明すべきであった。
- 授業時間が残り少なくなったとき、準備した会話・教材の一部を無理に取り上げることは、学習者の負担と混乱を招くので、取り上げず、学習した内容の復習などの時間にあてるべきであった。

4. 学習者の意見

学習者に、授業後に書いてもらったアンケート（1. 満足したか。2. 内容を理解できたか。3. 何を学習したか。4. コメント）は以下の通りである。

- 1 日目 A 1. 満足。
2. あまり理解できなかった。
3. 殆ど、語彙。少し、文法項目。
4. 自分の日本語のレベルでは、クラスのレベルがちょっと怖い。文を作るモチベーションが少ない。
- B 1. 満足。
2. よく理解した。
3. 動詞の形、語の丁寧形、新しい語彙、自己紹介の練習
4. 私は、授業が全部日本語でも理解できた。
- C 1. 満足。
2. よく理解した。
3. 学習したけど、新しい文法項目でもっと練習があるといい。
4. 多分、会話は、リスニングの後だと、私達は読み通すことができた。

- 2 日目 A 1. 満足。
2. あまり理解できなかった。
3. これらのカテゴリーの存在を学んだけど、

- B
1. 満足。
 2. 理解した。
 3. 丁寧な尊敬の表現、色々な新しい文法的な表現
 4. 多分、私は、もう少し練習を必要とする。今日習った教材を 前に。
- C
1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. 毎日の状況の中のいくつかの異なった敬語の使い方。とても役に立つ。
 4. 今日の授業は良かった。会話をより注意深くやれたから。もっとわかりたいと思う。
でも、時々、ちょっと速かった。私は、それは授業で大切なことだと思うよ。みんなが
ついていくのに。
- D
1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. 私にとって、殆どは復習。でもいい授業。ておく、尊敬の形。
 4. もっと、学習者間のインターアクション、会話の練習。違った活動がいいと思うよ。
- E
1. わからない。
 2. 理解した。
 3. いい教材。理髪店でどのように話すか学んだ。
 4. 学習の後で、フォローアップするレッスンが大切。

- 3 日目
- A
1. 満足。
 2. 理解した。
 3. いくつかの日本語の実用的なスキル。道順を教えることは一番いい例。私は、会話の要素に色の符号も考えた。学んだ点のタイプによれば、優秀な道具になる、分類するための助けの、練習の取り扱いの。歓迎だ、本当に助けた、以下の使用とそれらがどこでどんな風に使われるか見ることは。
- B
1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. やりもらいの動詞。道順を教えたり、聞いたり。予定を作ること。
 4. あげる、もらう、くれるの動詞の関係は、習得して、満足して使うようになるのにより練習を必要とするだろう。スケジュールのための電話を使った練習はいい考え。
- C
1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. 尊敬語と謙譲語の形の復習はよかったし、昨日から補強した。やりもらいの復習も私には良かった。
 4. 道順を教えるのは、私にはよかったけど、もっと複雑なことを言うことができるようになりたい。右に曲る、左に曲る、まっすぐ行くに制限された状態には不満を感じる。私は今日の授業はよく構築されていて、色々な種類が沢山あって、良かったと思う。

- 4 日目 A 1. 満足。
 2. あまり理解できなかった。
 3. 使役の変形。それといくつかの形。
 4. 今日のスピードは良かった。速すぎる多すぎる情報でなかった。
- B 1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. するとさせるの動詞の形。新しい語彙。これらを会話の中でどう使うか。
 4. 先週の文法の復習は良かった。
- C 1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. 動詞と使役の形。目上の人に対する丁寧な話し方。
 4. 今日は良かったけど、もうちょっとゆっくり会話をやってくれたら、私は理解できた。
- 5 日目 A 1. 満足。
 2. あまり理解できなかった。
 3. いくつかの尊敬語の構造。
 4. 沢山の方法の中で私の日本語の能力は不足している。このレベルの教授のための。もし、それが他の学習者にとってなら、私はもっと沢山勉強することを感じる。
- B 1. 満足。
 2. 理解した。
 3. もっと、尊敬と謙譲の表現。伝えて下さいの丁寧。理由の「で」。
 4. 沢山の情報と新しい内容がプレゼントされた。
- C 1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. いくつかの謙譲語と尊敬語の間の違い。もう一度、私はこれをやった。私が使う前。もし、私が沢山忘れていたら。
 4. いくつかの文法項目は難しく、もうちょっと、説明があったらよかった。一回だけでなくもっと練習が必要。
- D 1. 満足。
 2. よく理解した。
 3. 電話でのコミュニケーションの仕方。私の同僚、スタッフ（事務員、校長、英語の先生）に対して。

5. 考察

興味深いことに、行った授業に対する実習生（筆者）の考察と、行われた授業に対する学習者の評価は、必ずしも一致しない。実習生（筆者）がクラスの雰囲気、全体的な授業の流れを考えるのに対し、学習者は個々の立場で授業を見る傾向があるのかもしれない。しかし、今回の C クラスの学習者達は、個々の立場とは別に、実習生（筆者）が、少しでもよりよいクラス授業を行えるように、沢山の暖かい

アドバイスもくれた。(本当に、学習者となってくれた AET の方々には、心から感謝の意を表したい。)

学習者が、実習生(筆者)の授業を好意的に評価した可能性を差し引いても、クラスの中で、日本語能力のレベルが高かった学習者は、文法を積極的に学習しようとしていたことは疑いのない事実である。中級クラスでの文法の取り扱いを考える上で、クラスの中の能力の高い学習者は、文法(だけではなく、日本語全般)のより高いレベルの学習を望んでいることを、先ず、確認しておきたい。

そして、Cクラスの1時間目の授業では、場面シラバスを用いた実に様々な傾向の授業が行なわれたわけだが、授業を行った実習生(筆者)はもとより、授業を受けた学習者も(クラスの中で辛い思いをさせてしまった学習者も唯一「理解できた」と評価してくれた)、よい授業と考えたのは、実習3日目のタスクを中心とした授業であった。

勿論、この3日目の授業には、「電話をかける」タスクに不手際があったこと、タスクを終えた後の確認作業がなされなかったこと、「電話をかける」タスクの次に行った「道順を教える」のリスニングとタスクが入れ替わってしまったことなど、数々の問題点もある。しかし、離れた2つの部屋で、実際の電話を使ったことは、学習者に臨場感を与え、電話をかけて相手と約束を取り付けたこと、タスクを達成したことは、学習者に大きな喜びと自信を与えたと思う。

また、同じくこの3日目の授業で行なわれた「道順を教える」のリスニングでは、学習者達が(実は実習6日目の読解の授業において、読解力のなさが判明するのであるが)、極めて優れたリスニング力を持っていることが明らかとなった。このリスニングでは、学習者Aも、他の学習者に何ら遜色なく、好成績を収めていた。(学習者Aは、このように、学習の色々な場面で、他の学習者に何ら遜色なく、寧ろ、抜きん出いることもあったのだが、それを、学習者Aにちゃんと伝えられなかったことが心残りである。)

いずれにせよ、本稿においては、場面シラバスを用いた5日間に亘る実習授業を通じて、中級クラスでの文法の取り扱いについて、①会話の呈示は1つとし、②会話の中に学習者の負担とならない程度の文法項目を入れ、③会話にある文法・表現の説明をした後、④会話にある文法・表現の練習を行い、⑤会話に基づいた、臨場感のある、また、達成感を得られるタスクを行うことが有効であることを一考察として述べる。また、授業としては、授業の最初に前回の授業の復習を行うこと、リスニングなど他のアクティビティも行うことが、学習者に満足感を与えると考えられる。

更なる考察として、田中(1989)では、教師主導のコース・デザインであっても、学習者にある程度の満足感をあたえる1つの方法として、コースデザインの全体をすべて学習者に示してしまうこととし、その方法としてコンピューターを利用することが挙げられている(pp. 108-109)。

Cクラスにおいては、ホームページを作成し、学習者に自由に授業の内容を見てもらうようにしたが、1時間目の授業については、各授業のタイトル(場面)を載せるに留まった。テキストの作成が早く、会話を載せることができたら、各学習者は、学習予定の文法項目、語彙について予習をすることが可能であり、実際の授業での文法の取り扱い方も変わってきていたであろうと推測される。

また、田中(1988)では、場面的シラバスの長所と短所として、長所は必要な場面を中心に教育するため、学習した直後でもその場面でありさえすれば十分に日本語を使えるという点であり、欠点はシラバス内で、取り上げられた場面では十分に日本語を使うことができるが、別の場面になるとまったく使えなくなる、つまり応用力がつかないとされる(p. 91)。

Cクラスにおいては、学習者が本コースを終えて、秋にAETとして、派遣先の中学・高校に赴いた際

に、実践的に日本語が使うことができるようにとの考えから、場面シラバスを選んだのであるが、場面シラバスによって習得された会話は、呈示された場面(会話)でしか使うことができないことを憂慮し、2日目、4日目、5日目のように、いくつかの会話を学習者に呈示してしまった。しかし、いくつかの会話を呈示したところで、それぞれの会話に十分な練習・実りのあるタスクが行えるわけではなく、学習者を悩ませ混乱させる結果に終わった。

このような場面シラバスの長所と短所を理解して、適切に文法を組み入れ、また、文法を組み入れた場面シラバスを、実際の現場で適切に取り扱うことで、中級クラスでの文法の指導は成功すると考える。

参考文献

- 田中望 (1988) 『日本語教育の方法ーコースデザインの実際ー』 大修館書店
田中望 (1989) 『講座 日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育伝授法(上)』
「コースデザイン」93-110 明治書院

資 料

(授業後のアンケート)

Please answer the following questions regarding the class you have just finished.

1. Were you satisfied ?

yes

not sure

no

2. Was the class content understandable to you ?

I understood well

I understood

I didn't understand

3. Did you feel you were able to learn ?

yes

no

What ?

4.. Other comments (Please make suggestions here)

Thank you very much for your feedback !